赤城山の“すその”で暮らそう！　前橋移住を考えるフリーペーパー

susono

vol.2
[2017.11]

この土地に培われてきた あたりまえのスロー。

前橋市移住コンシェルジュは あなたの夢を応援します。

移住コンシェルジュ
鈴木正知

https://www.facebook.com/maebashiiju/

Let's Learn 上州弁

猪谷六合雄（いがや くにお）

1890年、赤城山の猪谷旅館の長男として生まれる。24歳でスキーを始め、様々な道具を自作。昭和初期には赤城山に50m級のジャンプ台を自力で構築した。日本の近代スキーの草分け的存在。

解説

「～くんない」は「～ください」の意味で用いられ、「～してくんない？」という疑問形の「くんない」とは明らかに違う。何かを人にお願いするときに使う。

前橋にある企業の仕事や様々な取り組みを紹介します。
あなたに合った“前橋での働き方”が見えてくるかも!?

ハロー！まえばしWORK

多様な生き方を認め合う社会へ向けて

アーツ前橋ミュージアムショップ mina（ミーナ）

アーツ前橋のミュージアムショップmina（ミーナ）は、群馬県内の作家のほか、全国にある障害者施設の利用者が制作した作品を集めて販売するミュージアムショップだ。国内外から様々な人が訪れる美術館に作品を置くことが、活動の周知に繋がるという思いから、2014年にオープンした。「障害のある方が作ったという伝え方はあまりしないが、お客様から背景を聞かれた時に説明できるよう、現地へ足を運ぶことも多い」と話すのは、店員の千木良真弓さん。「心を動かされるような作品はやはり、作り手が楽しみながら制作している。一人ひとりの個性を認め、最大限に生かすことの大切さを、この場所から発信していきたい」とも。

協力　**アーツ前橋ミュージアムショップ mina（ミーナ）**
群馬県前橋市千代田町五丁目1-16　アーツ前橋1F

移住コンシェルジュ便り

県都前橋と言われ、人口30万人以上の中核市でもある前橋に、皆さんはどのようなイメージを持っていますか？　前橋の良さは、実際に暮らさないとなかなか見えてこない部分もありますが、あえて簡単に言い表すとすれば、中心市街地であるまちなかやその周辺での「まち暮らし」、里山での「里暮らし」、黒檜山（赤城山）での「山暮らし」から自分のライフスタイルに合った場所を選び、〝あなたの思うままの暮らしが実現できるまち〟なのではないかと思います。

実際、これまで前橋を案内した方々も、「前橋って意外と都会」「病院が多いね」「子育てしやすそうな環境がそろっているなぁ」「こだわったお店があっていいね」「市街地から車で10分で、ホタルが棲む里山があるなんてなんか不思議」「赤城山の南面に来ると、まちの夜景がすっごくキレイ」など、それぞれの感性に合った前橋の良さを見つけているようです。

今年の5月、赤城山の南面地域がチッタスロー（スローシティ）に認定されました。これを受けて、赤城南麓は、自分らしいゆったりとした暮らしをするエリア、中心市街地は、都市機能が充実したコンパクトシティといった双方の特徴が、今後ますます際立ってくることでしょう。もしかしたら、体が動く内は里山で畑でもしながら暮らして、年を取って不安を感じたらまちで安心して暮らすといった地域内移住も可能かもしれません。

暮らしたいまちが目指し進もうとしているビジョンが、自分のしたい暮らしのイメージと一致しているかどうか。こういった所も、移住をする上では非常に重要なことではないでしょうか。

鈴木正知（すずき　まさとも）

東京都町田市出身。上野動物園や葛西臨海水族園の飼育員、長野県戸隠イースタンキャンプ場管理人インターブリターなどを経て、2006年に前橋市へ移住。市内23の行政区を集めて地域活動の情報共有をする「前橋地域づくり協議会」や「前橋の地域若者会議」を立ち上げて以来、前橋市の地域づくりに携わる。2015年より、前橋市の移住コンシェルジュに就任。

歩いて帰ろう

たまにはと、遠回りをしてみる　　かつてのなじみの水辺道
ふと目の前に、小さな自転車と子どもたち　　彼らにとってはきっと新しい道

U-29（ユニーク）ピープル

前橋工科大学 工学部
総合デザイン工学科3年
力石 菜々子 さん（21）

2015年、大学進学を機に地元の青森県南部町から前橋へ。建築を主軸としたプロダクトやインテリアの勉強をしています。ある時、まちなかで働いてみたいと思っていたところ、縁あって開店まもないカフェで雇っていただけることに。また、友人とまちなかのオリオン通りにあるシェアハウスで暮らし始めました。気取った雰囲気はなく自然体で居られますし、他の住人も同じ大学のOBや現役生なので、建築やまちの話で盛り上がることも多いです。ボウリングやキャンプなど住人持ち回りのお出かけ企画も毎回楽しみで、次はなんと私のターン！どんな企画かはもちろん内緒ですが（笑）

取材メモ

スローシティ（チッタスロー）とは何かを考えた時に、真っ先に浮かんだのが林さんだった。スローシティを実現するためには、ただオルビエート市や他の都市を真似ただけでは不十分で、その地域に長い時間をかけて蓄積されてきた文化をまずは理解した上で、〝自分らしい暮らし〟を確立させること。そして、それを次の世代へ引き継いでいくことが大切ではないかと思ったからだ。

より〝自分らしい暮らし〟を求めた結果、地元の前橋に戻り、代々続いてきた家業を継ぐ決心をした林さんのストーリーは、スローシティの概念を地でいくものであるし、地域の子ども達と一緒に自然体験をする「まえばし農学舎」の活動は、赤城山や前橋の良さを分かりやすく次の世代へ伝えている。本誌では他にも、前橋という土地にある素敵なモノコトを柔軟に捉え、最大限自分らしく生きようとする前橋人を紹介している。是非ともこの紙面から、前橋が考えるスローを実感して欲しい。

（編集・遠藤千尋）

Instagram
@susono_maebashi

めぶく 前橋市

susono vol.2
発行日：平成29年11月1日
発行：前橋市役所 政策部 未来の芽創造課
〒371-8601 群馬県前橋市大手町二丁目12-1　TEL 027-898-6513　FAX 027-224-3003

大切なのは、ゆるく長く、持続できること

晴れている日、前橋の街からは広くて爽快な青空にくっきりと赤城山が見える。その麓、自然豊かで農業や観光業が盛んな赤城南麓エリアの釣り堀で、手作りハム工房・レストラン「林牧場 福豚の里 とんとん広場」を経営する林智浩さん（40）に会った。この釣り堀から林さんの仕事場までは車で5分ほど。季節に1回は訪れるという。秋に入りちょっぴり冷たそうな水の中を、マスやイワナが元気に泳いでいた。

Uターンして、地元で働くことにした

「25歳くらいの時は、まだ東京で会社員でした。営業職で、飛び込み営業もよくやっていましたね。元々、実家が商売をやっていて、それを手伝うのが嫌でこの町を出たわけですが、社会人3年目として働いていたある時、ふと「地元へ帰ろう」って思ったんです。東京では、平日は満員電車に揺られ、休日になると群馬や長野、新潟などに出掛けてはアウトドアを楽しむという生活。根っから外遊びが好きな僕にとって、近くに山や自然がある環境が、すごく魅力的に映ったんでしょうね。手の届くところ、すぐ足を運べるところに自然がある。ここの釣り堀も、小さい時からよく連れてきてもらっていましたよ」

今でこそ、若い世代の里山移住の話はよく聞くようになったものの、当時同じくらいの若さで地元や自然に目を向けている人は、周りにはほとんどいなかったという。

「自分で商売をやりたいという気持ちは昔から持っていました。僕が子どもの頃に見ていた、祖父母がたくましく働く姿が妙に記憶に残っていて。外国から輸入した豚を移動させるために、川で休ませながら徒歩で連れて帰ってきたという逸話を母から聞かされていました。僕もそれに負けないくらい強い思いを持って仕事をしたいなと感じていたので、Uターンすることにしてからは一転して、家業を継ぐことに決めました。

帰ってきた時に大変だったのは、とにかく母親が前橋じゅうで有名だったことですかね（笑）。最初は普通の社員として入社したわけですが、母親と比較されてしまうことも多くて」

二度の転機。そして赤城山南麓から世界一の生ハムを

ハム工房の仕事にとどまらず、地域で精力的に活動する林さん。その根底にはどんな想いがあるのだろう。

「実は、前橋に戻ってきてから大きな出来事が二つあり、そこで決意して動き出したことが今の自分を作ったと思うんです。だから、帰ってきて良かったなあって。

一つ目は、子どもの一人が難聴で生まれてきたこと。同じような境遇をもった人たちの集まりに参加してみると、「絶対にいじめられるから覚悟したほうがいい」といった厳しいアドバイスをもらいました。それが本当だとすれば、何かが起こった時に助け合える関係を周囲と作らないとまずいなと思って。自分が困った時に助けてっていうだけじゃ、誰も助けてくれない。困っている人がいたら進んで助ける。こういうことは、子どもが生まれてからはかなり意識するようになりました。

二つ目は、会社でハム職人の仕事を見て、自分もやりたい！と思ったこと。すぐさま縁のあったドイツのハム工房へ修行に行きました。新人の研修先としてもお世話になっていて、今でもあたたかく迎えてくれるのが嬉しいです。日本の食肉文化は江戸後期に始まったものなのでどうしても浅い。それを日本の文化として根付かせていくために、長年培われてきた外国の文化や技術を学び続ける。そして、商品や料理もただ作るのではなくギフトのように思いを込めて作る。熱が入ることが仕事になっているのも自分にとって大きなことなんでしょうね」

ドイツを皮切りに、イタリア、スペイン、スロバキア、ハンガリー、フランスなど多くの国々のハム工房を巡ったそう。ドイツやイタリアは今でもよく行くのだとか。

「赤城南麓を生ハムの産地にしたい。そして、主力である骨付きの生ハムを武器に世界一の生ハムを宣言したい。土地に住んでいる、その土地にしかいない固有のバクテリアや乳酸菌、そのバランスでハムの味が作られていく。同じレシピで作ったとしても、土地によって味が変わる。ここの味は、ここだけの味なんです。だから熟成させることが好き。こういったことを実現するために、まずは僕たちの持っている生ハム作りのノウハウをしっかり確立させたい。そして、他の養豚農家から豚肉を預かって生ハムに加工したり、希望する方々にノウハウを伝えていくことで、生ハム文化を赤城南麓に広めていきたい。地元を一番大事にしつつ、世界一を掲げるうえでは、銀座やニューヨークへの出店も、しないといけませんね（笑）」

自然となじむように、調和するように

取材中、笑顔や冗談を欠かさない林さんだが、自らの会社はもちろん、地域の事業にも積極的に取り組み、考えなければいけないことや悩み事も多い。

「落ち込んだり、悩んだりは日常茶飯事。リフレッシュしたいときには赤城山に登るんです。一人で（笑）。ここ5年くらいはよく登っていますね。山でご飯を食べたり、本を読んだり、お酒を飲んだり。仕事後に登って夜を明かすこともあれば、早朝に登ってから仕事に行くこともありますよ」

林さんが人生の多くの時間を過ごす赤城南麓エリアが今年5月、スローシティとして認定された。宮城県気仙沼市に続き、日本国内では2例目となる。

「意識しなくてもずっと続けていられることがスローシティに大切なことなんだと思います。ゆるく長く持続できること。僕にとってのスローはやっぱりソロキャンプですかね。すぐ近くに山や自然のある環境だから、思い立ったときすぐに山へ登れる。それから最近では、道路沿いにあるお店のロードサインを少しずつ小さくしているんですよ。多分まちとしてできるのは、こういう看板の規制だったりするんでしょうね。民間だけでは統一感を作るのは難しいですから。人工的なものが道に飛び出している状況って、改めて考えるとやっぱり良くないなって。自然となじむように、調和するようにするべきだと思うんです。だって、赤城山の一番いいところは〝自然〟なんだから」

都会の釣り堀とは違い、林や小川などの自然に囲まれた環境もこの土地ならでは。多忙な林さんにとっていいリフレッシュの場となっているようだ。釣り上げた魚を持ち、満面の笑顔。

NPO法人 まえばし農学舎

「伝えたいことがある。本物に触れる特別な体験。」をコンセプトに2016年、赤城南麓で活動する農家や職人が中心となって組織したNPO。林さんが代表を務める。農業体験「農家の学校」や、手ぶらで赤城山の自然や食を楽しむ1泊2日の「ファーミングキャンプ」など、「農と食」を中心にした赤城山ならではの体験を提供する。「農業の大変さではなく、収穫の喜びや、音楽を聴きながらやっているかっこいい姿も教えてあげたい」と林さん。

林さんのおすすめ

Roselle;353+C
（ロゼル　サンゴーサンシー）

前橋市柏倉町2189-111

とんとん広場のほど近くにあるカフェ、Roselle;353+C（ロゼル・サンゴーサンシー）は、林さんが一人でも訪れるというお気に入りの場所。フランス・ブルターニュ地方の郷土料理であるそば粉のガレットは、後閑養鶏園の平飼い卵やとんとん広場のロースハムをはじめとした地元の食材を使っているほか、そば粉100%で作るグルテンフリーの生地にもこだわっている。手づくりした旬のものを、ゆったりとした自然の中で味わう。そんな“当たり前の幸せ”が実感できるお店だ。

チッタスロー（スローシティ）とは？

チッタスロー（イタリア語でスローシティの意）とは、1999年、前橋市の友好都市であるイタリア・オルビエート市から始まった運動のこと。スローフードやスローライフといった概念から影響を受けており、地域固有の食や農産物、生活様式、歴史文化、自然環境などの保護に加え、住人一人ひとりの個性や多様性の尊重などを目標に掲げる。世界中で30カ国236都市が加盟しており、日本では宮城県気仙沼市に次いで、2017年5月12日に当市の赤城南麓地域（宮城・富士見地区、芳賀・大胡・粕川地区の一部）が加盟した。ロゴデザインは、自然豊かな場所で生き、ゆっくりと前進するカタツムリがまちを背負っている姿を表現している。